

住みたい・住み続けたい

地域課題の
解決に向けた
取組み事例集

まちづくり大百科

～めくり、つながる茨木のみらい～



令和5年(2023年)3月

茨木市

目次

はじめに..... 1

活動事例 3

【IT・デジタル化に関する事例】		
■水尾校区自治会連絡協議会	地域の魅力や活動を発信する 「ホームページ」の作成にチャレンジ！	3
■井口台北自治会	「回覧板もデジタル化？」 自治会の公式LINEを活用した情報発信！	5
■西地区地域協議会	コロナ禍でも活動を継続するための新たな挑戦 「WEB文化展」の開催	7
【加入促進・組織活性化に関する事例】		
■大池2丁目東自治会	役員の負担を軽減する2つの工夫 「自治会の組織変更」と「会長見習い制度」	9
■豊川地区まちづくり協議会	持続可能な地域交流・対話に向けて 地域独自でワークショップを開催	11
【親睦・ふれあい活動に関する事例】		
■玉櫛小学校区地域協議会	「SLまつり」がつなぐ地域の輪	13
【防犯・防災に関する事例】		
■大岩自治会	地域の安全を守る「大岩パトロール隊」	15
■橋の内自治会	防災意識を高める「防災看板」の設置	17
■葦原地区自主防災会	作り手の思いを込めた「自主防災会だより」	19
【環境美化に関する事例】		
■安威北部自治会	ごみの適正排出に向けた啓発活動	21
■佐保自治会	「アドプト・リバー」の取組みがつなぐ地域の絆	23
■主原町自治会	地域の憩いの場を守る清掃活動と 「クリーンプロジェクトチーム」の発足	25
■鉢伏山森づくりの会 (岩阪自治会)	里山を「守る活動」と里山に触れて「学ぶ活動」 鉢伏山森づくりの会の発足と里山環境保全	27

編集後記 29

■イバマチ編集会議の取組み経過 29

■イバマチ編集会議 2022 活動写真 30

■地域と学生の新たな連携事業「次なる茨木まちづくりアイデア検討会議」 31

■次なる茨木まちづくりアイデア検討会議活動写真 32

■イバマチ編集会議に参加して、私が感じたこと(参加学生コメント集) 33

住みたい・住み続けたい まちづくりに向けて

茨木市には33の地区があり、それぞれにおいて、ふるさと祭りや体育祭、文化展等の地域行事が行われ、地域のつながりを育むとともに、地縁による自治会をはじめ、地域の各テーマ型組織や各種団体（以下、「各地域組織」という。）による地域課題の解決に向けた取組みが実践されています。

そのような取組みを地域の皆さまに知っていただく機会の一つとして、茨木市では、令和3年度に、地域の課題解決に向けた創意工夫した取組みをまとめた事例集「住みたい・住み続けたいまちづくり大百科（以下、「大百科」という。）」の第1弾を作成しました。そして今回、第2弾として、新たに13の事例を掲載した大百科を作成しました。

第1弾、第2弾ともに、「知って・学んで・つながる」ことを目的に、市内大学と連携した「イバマチ編集会議」を開催し、学生による各地域組織への取材を通して紙面を作成し、紙面には担い手の想いや取材した学生の感想も併せて掲載しております。

お住まいの地域や近隣地域でどのような取組みが行われているかを、大百科を通して地域内で共有いただき、今後の地域活動の一助としていただければ幸いです。

なお、本冊子に掲載いたしました事例の他にも、各地域で取り組まれている事例がございましたら、担当課まで情報をご提供ください。引き続き、さらなる地域活動の活性化に向け、地域の取組み事例の発信に努めてまいります。

令和5年3月

茨木市 市民文化部 市民協働推進課

<イバマチ編集会議とは>

地域への取材内容の振り返りや、事例集のレイアウト・デザインの検討、原稿の校正などを行う、事例集の完成に向けて学生が主体となって取り組む会議が「イバマチ編集会議」です。「イバマチ編集会議」の取組みについては、事例集 P.29～30 に掲載しております。



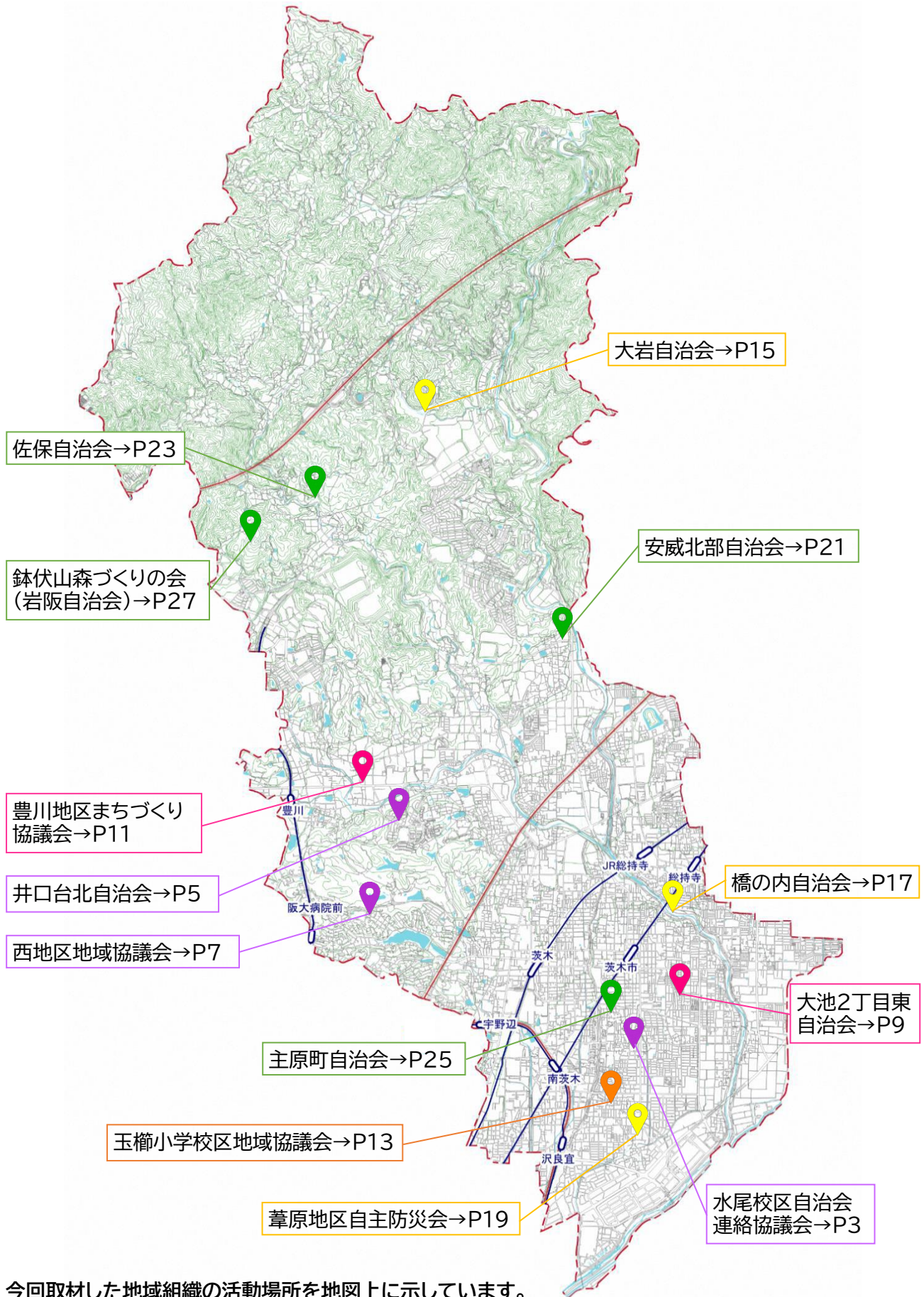
<令和3年度版 住みたい・住み続けたいまちづくり大百科>

茨木市では、令和3年度にも、地域の課題解決に向けた創意工夫した取組みを紹介する事例集を作成しました。令和3年度版の事例集は、市ホームページに掲載しておりますので、そちらもぜひご活用下さい。

茨木市 まちづくり大百科

検索

今回取材した地域組織の活動場所



今回取材した地域組織の活動場所を地図上に示しています。

水尾校区自治会連絡協議会

地域の魅力や活動を発信する 「ホームページ」の作成にチャレンジ！

～地域コミュニティの維持・継続に向けて～

水尾校区自治会連絡協議会(以下、「自治会協議会」)では、自治会未加入者への情報発信のために、自治会協議会でホームページを立ち上げ、情報発信を行っています。

■自治会未加入者にも地域を知ってほしい！～現状を打開するために～

水尾地区では、多様な組織が様々な活動を行っていますが、その情報は基本的に自治会員にしか行き届いておらず、情報が届いていないため、自治会員以外には活動に参加してもらえない状況にあります。また、地区内の自治会加入率は50%を割っており、中西会長は、地域活動や自治会加入率を改善していくために、自治会に加入していない方に情報を届け、活動を知ってもらう必要があると感じていました。

そんな中、茨木市自治会連合会の総会において、中西会長は、他の地区の連合自治会がホームページを立ち上げていることを知りました。そこで「水尾地区でもホームページを作成してはどうか」と、自治会協議会の総会で提案をしたところ、自治会のホームページを既に作成されている自治会長がおり、その方に自治会協議会のホームページを作っていただくこととなりました。

■地域内外を取材し、研究！水尾ってこんなおもしろいことしてるんやで！

ホームページ作成を担当した水尾四丁目自治会会長の小副川(おそえがわ)さんは、会長になるまでは、「自治会活動なんて面倒なだけ」と、思っていました。

しかし、初めて参加した地区のスポーツレクリエーション大会で、子ども達に楽しんでもらうために地域で協力して準備し、当日は地域の人みんなで一緒に応援して熱くなった体験で、自治会活動に対する意識が変わりました。「自治会活動は参加してみても初めて楽しさが分かる、クセになる」と、感じるようになり、「自分が活動に参加して初めて気づいたように、地域の人もこの楽しさに気づいていないだけではないか。」と、思いました。だからこそ、活動の楽しさをどんどん発信し、多くの人と楽しさを共有することが出来れば、地域でもっと面白いことができると考え、自治会や、自治会協議会のホームページ立ち上げに、前向きに取り組まれました。

POINT

せっかくホームページを作ったからには、たくさんの情報を発信したいと、小副川さんはこれまで以上に積極的に地域活動に参加されており、取材を通して地域の人々の思いや困りごとなどを知ることが出来ています。

また、水尾地区の活動の参考にするために、他の地域に足を運んで話を聞くようになり、新たなアイデアやヒントを得たり、地域を外からの視点で見ることができるようになりました。

■何事もチャレンジ！～幅広い情報発信で地域の関心を高めたい～

今後は、自治会協議会の情報のみならず、地域の各種団体の情報を、ホームページで積極的に発信していきたいと考えています。そのために、ホームページに記事を掲載する前提で、活動ごとに写真などの素材を集め、情報を集約して記事を掲載するという仕組みづくりが必要であると考えています。

また、担い手となる地域の住民は高齢者が多いので「将来的には、若い方にもホームページの編集に携わってもらい、一緒にホームページの魅力を高めていきたい」と、小副川さんは話してくれました。

続けて「形骸化しているホームページではなく、楽しい水尾独自のホームページを作っていくために、地域の子どものアイデアも取り入れたい」と、話してくれました。

ホームページ運営以外では、「わがまち探検隊」のようなコンテンツを実施し、地域を知る機会を作ることや、地域のニーズがある「野菜の無人販売」などにもチャレンジしたいと教えてくれました。

取材の中で、「SNSも活用していきたい」との声があり、学生がInstagramの使い方について、レクチャーをする場面がありました。その後、自治会協議会のアカウントを実際に作成し、情報を発信されています！



自治会協議会のホームページ



ホームページを立ち上げた3つのねらい

- 地域活動への参加の第一歩として、まずはホームページで情報を知ってほしい。
- 情報を知ってもらい、関心を持ってもらうことで、自治会や地域活動への新規参加に繋げたい。
- ホームページに資料をアーカイブ化し、いつでも見れるようにしておくことで、役員交代時にスムーズな引継や運営を可能にしたい。

情報発信の取組みは、まだ始まったばかりです。コンテンツの魅力を高めたり、多くの人に見てもらえるように、勉強しながらチャレンジしていく予定です。

■取材を受けた地域の方から一言

水尾校区自治会連絡協議会 中西会長 (写真左から二番目)

自治会活動の主な担い手が高齢になる中で、若い人々に関心を持ってもらうためには、自治会が住民にとって価値のあるものに変わればよいと考えています。そのために、ホームページを活用し、自治会活動やボランティア活動に関心を持ってもらえる一助となればよいと考えています。

■取材をした学生から一言

立命館大学政策科学部 渡邊さん (写真右から二番目)

地域を盛り上げていく事について考えていて、SNSやホームページ等を活用して水尾地区の事を認知してもらうために取り組まれていました。新しい事に熱量を持って取り組まれている姿勢を肌で感じ、私自身もそういった人になりたいと思いました。



取材後の集合写真

井口台北自治会

「回覧板もデジタル化？」自治会の公式LINEを活用した情報発信！

～役員負担軽減と迅速な情報共有を求めて～

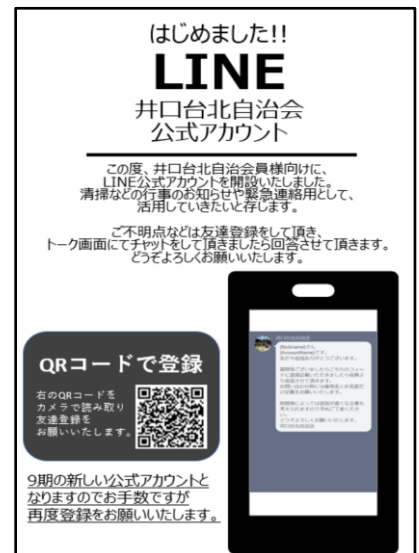
井口台北自治会は、郡山小学校のすぐ北側、160世帯の戸建住宅が立ち並ぶ新興住宅地で組織されている自治会で、加入世帯の平均年齢が比較的低い自治会です。井口台北自治会では、役員負担の軽減と、自治会からの情報をスピーディーに会員に届けるために、「自治会公式LINE(以下、「公式LINE」)」を活用した情報発信に取り組んでいます。

課題解決の第1歩～伝える・知ってもらうことから始める「公式LINE」～

井口台北地区は、若い世帯が多く活気のある地域ですが、近年は自治会加入率の低下が課題となっています。自治会を設立して現在9期目ですが、6期目から加入世帯数が減少傾向となっており、どうすれば加入世帯を維持していくことができるかを模索しています。

自治会を退会する世帯の声を聞き、役員で課題について話し合う中で、退会する理由は「①役員や会員の負担(仕事や家庭の都合で難しい)②自治会費の使い方に不満がある③情報の伝達不足」が大きいのではないかと考えました。

情報の伝達不足については、これまで回覧板を利用して情報共有を図っていたため、班によっては、情報が行き届くまでに1か月かかる場所もありました。また、回覧板を見ても自治会費の使い方などが十分にわからないという声もありました。そこで、情報共有の課題を解決するために、令和3年8月から「公式LINE」を活用した情報発信をスタートしました。



公式LINE開設を知らせるチラシ

POINT1

神山会長は「状況に応じて使いやすいツールを選ぶことが大切」と、話します。以前は、役員間の情報共有にLINEのグループトークを使用していましたが、やり取りの中で重要な情報が埋もれてしまうため、掲示板機能を使えるLINEWORKSを現在は使用しています。

公式LINE開設後は、紙でやり取りする方が共有しやすいものはこれまで通り回覧板で共有し、緊急の連絡や行事のお知らせは公式LINEで発信しています。公式LINE導入後の変化について、「会員の方に伝えたい情報をすぐに見てもらえるようになった。また、会員の既読率が分かり、スムーズなやりとりができることに加え、資料の印刷や配布などの手間も減少したので良かった。」と、神山会長は話してくれました。

公式LINE導入後は、ちょっとしたことで自治会内で共有できるようになったので、自治会への苦情も減ったそうです！

POINT2

公式 LINE を使って感じたそのほかのメリット

- 1か月に1,000通までは無料でメッセージ配信が可能なので、費用がかからない。
- 公式 LINE と自治会員の LINE アカウントがつながるので、他の会員に自分のLINEを知られることもなく、安心して使ってもらえる。
- LINE 上にデータが残るので、資料の再確認や役員の引継ぎの際にもとても便利。

■ 持続可能な自治会運営に向けて～今後チャレンジしたいこと～

公式LINEを活用した情報発信をスタートしたことで、情報の伝達不足についての課題は、解決に向かっています。井口台北自治会では、次のステップとして、令和4年9月に自治会未加入世帯を含めた地区の全世帯を対象としたアンケート調査を実施し、自治会に加入しない理由や自治会に関する地域住民の率直な意見を確認しました。今後は、このアンケートの結果を分析し、自治会に入るメリットを打ち出すような取組みを行っていく予定です。

他にも、神山会長は「この地域は自主防災会に加入していないので、自治会として防災対策にも取り組んでいく必要があると感じている。」また、「自治会に関心を持ってもらえるように、市内の大学生と地域の子も達が交流できるようなイベントも実施していきたい。」と、今後の展望について前向きに話してくれました。



取材の様子

■ 取材を受けた地域の方から一言

井口台北自治会 神山会長（写真左から二番目）

全世帯アンケートについては厳しい回答が多かったです。特に多かったのが役員の負担が大きいという意見です。これについては会則を見直し、任期や業務負担減、役員報酬の検討などを考えております。会費の使い方や自治会員であるメリットについてもご指摘がありましたので、今後の活動に理解を得られるよう運営していきます。

■ 取材をした学生から一言

追手門学院大学地域創造学部 大西さん（写真一番左）

LINE を活用した情報発信は自治会の面倒な回覧板の方法を変える画期的なものであり、こういった新しい取組みによって自治会というイメージは変化し、多くの人に参加するきっかけとなるのではないかと思ったので、これからもぜひ続けてほしいです。

立命館大学政策科学部 小久保さん（写真一番右）

自治会の会員数が減少しているという一つの問題について、自治会費や住民同士のつながり、情報発信など様々な視点から改善していくことが大切だと知りました。LINE による情報発信などの時代に合わせた取組みは、よりよいまちづくりの一つの方法として参考になりました。

立命館大学政策科学部 小川さん（写真右から二番目）

時代の変化に合わせた取組みをされていることにとても驚きました。回覧板は地域の人を繋げる大事な取組みの一つでもあります。重要な「情報を伝える」ことは難しい状況になってきており、LINE を利用して発信を始められたのは効果のあることだと思います。加入者の平均年齢が若いからこそできることでもあると感じました。



取材後の集合写真

コロナ禍でも活動を継続するための 新たな挑戦 「WEB文化展」の開催

～想いのこもった作品を届けるために～

西地区地域協議会(以下、「協議会」)では、地域の方の作品展示の場である「文化展」を小学校の体育館で毎年開催していますが、コロナ禍の令和3年度はアルバムアプリを活用し、「WEB文化展」を開催しました。

■コロナ禍の制限がある中でチャレンジした文化展のWEB開催

西地区では、コロナの影響で令和2年度の文化展は開催できませんでした。令和3年度も中止の方向で検討していましたが、地域から「2年続けて文化展が中止になるのは寂しい。」「文化展を目標に作品を作ったのに。」などの声があがりました。既に文化展に展示する予定の作品の多くが完成していたので、このまま作品が埋もれてしまうのもったいないという思いから、なんとか工夫して文化展を開催できないか検討しました。

そこで、実際に小学校での対面式作品展示はせず、提供してもらった作品の写真をWEBで公開し、地域内外の方に見てもらえるWEB文化展を開催しました。

例年の文化展では、1,000点ほどの作品を展示しており、来場者は約2,000人程度ですが、WEB文化展には400点ほどの作品を展示し、最終的な閲覧数は19,352件と例年以上の多くの人に見てもらえ、展示した方はとても喜ばれました。

初めてのWEB文化展でしたが、多くの方が閲覧してくれたのには、ワケがあります。チラシを作成し、自治会での回覧や、地域の掲示板で周知したほか、茨木市自治会連合会が発行する「連合会報(令和4年3月号)」にもこの取り組みを紹介する記事が掲載されたことで、地域内外の方に閲覧してもらうことができました。

チラシに「QRコード」を掲載することで、すぐにWEB文化展のページにアクセスができます！



WEB文化展のチラシ

WEB開催するにあたって、出展者と閲覧者の両方の立場で考えて、取り組んだこと

<出展者への配慮>

- 地域外の方も閲覧できるので、プライバシーに配慮し、出展者の名前は非公開に
- 出展する作品の写真データは、メールで提出してもらっていましたが、写真撮影やメール操作が難しい場合は、協議会のスタッフが出展者の自宅や講座開催中に伺い写真を撮影
- WEBへの掲載作業の際は、作品名や写真の掲載し間違いなどのミスがないか、入念にチェック
- 誹謗中傷対策として、アプリのコメント機能は利用しないように閲覧者に呼びかけ

<閲覧者への配慮>

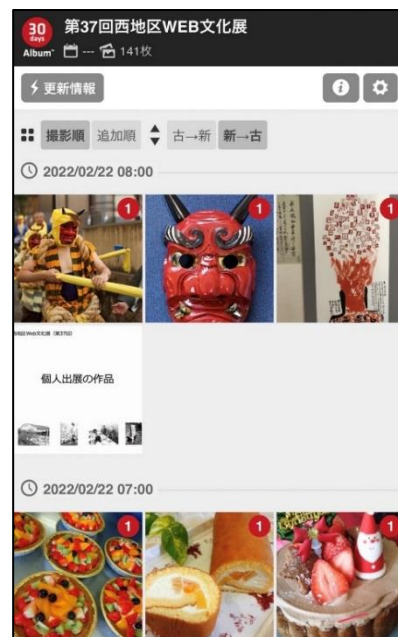
- 閲覧の際に不要な広告がでないよう、無料版ではなく年額5,000円の有料版アプリを使用

■新しいことにチャレンジした結果、地域の反応は？

WEB文化展を開催して良かった点について、田坂会長は「例年は小学校の体育館を使うということもあり、作品を見てもらえるのは1日だけで、その日を逃せば作品を見る機会はなかった。今回は、3月から7月末までWEBで作品を閲覧できたので、より作品が身近に、触れやすくなった。」また、「坂が多い地域なので、移動が大変な方も気軽に鑑賞することができた。」と、話してくれました。

地域からは、「昨年はコロナで作品展示の場がなくなり悲しかったが、今年は作品を発表する場があり、多くの方に見てもらえてとても嬉しい。」「遠方に暮らしている祖父母などに、子どもの作品を気軽に鑑賞してもらえた。」と、出展者にも閲覧者にも喜んでもらえました。

このように、WEB文化展についての地域の反応は良好で、対面形式での開催ができるようになって、WEB開催を求める声や、その他の行事でもWEB参加の対応をしてほしいといった声が届いています。



WEB文化展の実際のページ

■社会の変化や状況に対応しながら、地域で楽しむ活動をモットーに！

西地区では、今回取り組んだWEB文化展を契機に、今後はWEBやITを活用して、地域行事の宣伝や広報などの情報発信を行っていきたいと考えています。また、コロナが落ち着けば、子どもから大人まで一緒に楽しめるような地域行事も開催したいと考えています。

今後に向けて、協議会の浦野さんは、「WEB文化展の経験を活かし、どのような状況でも地域の人が楽しめるような活動を行い、地域を活性化していきたい。」と、前向きに話しておられました。

■取材を受けた地域の方から一言

西地区地域協議会 田坂会長（写真中央）

今回の取材は協議会の浦野公民館長（写真左から二番目）とともに受けました。WEB文化展事業は公民館他の多大なる協力のもと開催することができ、コロナ禍で多くの事業が中止となる中、形を変えて実施でき感謝しています。また、学生さんとのお話は地域事業の重要性を再認識することになりました。

■取材をした学生から一言

立命館大学政策科学部 板坂さん（写真一番左）

コロナ禍でも今できる新しいことを考え、実際に行っていることがすごいなと感じました。また、WEBを活用することで活動の幅も広がると思うので、是非今後も活用を続け、様々な地域の参考になってほしいと思います。

立命館大学政策科学部 森さん（写真一番右）

WEB文化展という新しい形で開催することで、地域の皆さんの作品とそれに込められた想いを大切にしていることが伝わってきました。オンラインにも対面にもそれぞれ違った良さがあると感じ、今後も形式に縛られず、皆さんの作品を届ける場が続いていくといいなと思います。

立命館大学政策科学部 柘田さん（写真右から二番目）

コロナ禍で、工夫したWEB文化展の開催は行っただけでも難しいのに、ITを用いて開催を成功させて素晴らしいと感じました。これからも様々なチャレンジを応援しています。



取材後の集合写真

大池2丁目東自治会

役員負担を軽減する2つの工夫 「自治会の組織変更」と「会長見習い制度」

～自治会運営を継続するための仕組みづくり～

大池2丁目東自治会(以下、「東自治会」)は、平成31年に近隣自治会が統合し設立されました。東自治会では、自治会長の負担を軽減する「会長見習い制度」を導入しています。

■自治会の2つの課題を解決するための組織変更

東自治会の設立前、大池二丁目東地区には6つの自治会があり、相互に連携を図るために、6つの自治会で連合会を組織していました。そして、それぞれの自治会において、会員の減少や、役員の担い手不足の問題を抱えていました。

平成30年に発生した大阪北部地震の際、当時、連合会の会長を務めていた齊藤さんは、6つの自治会の自治会長を通じて、二丁目東地区住民の安否確認を試みましたが、自治会長自身が避難所に避難されて連絡が取れない自治会もあり、安否確認をスムーズに行うことが出来ませんでした。

この経験から、連合会として6自治会が連携するよりも、二丁目東地区として1つの自治会を組織した方が、災害時の安否確認や自治会運営が円滑に進むのではないかと考え、自治会統合を進めました。

自治会の統合に向けての初めの一歩として、平成30年11月に、各自治会の現状を把握するためのアンケートを、6自治会の会員を対象に実施しました。アンケートの回収率は74%もあり、自由意見欄には自治会に関する多くの意見が寄せられました。

その後、アンケートの意見を踏まえつつ、各自治会の会則の良い所を取り上げて作成した会則と、「組織変更によって何が変わるのか」、「どんなメリットがあるのか」などをわかりやすくまとめたQ&Aを作成し、会員の方に理解を深めていただいた上で、組織変更の承認を得ました。

自治会の統合で苦労したこと

統合する際、最も大変だったのは会計処理で、各自治会で残額が異なるため、それを整理するのに当面は旧自治会の会計と新自治会の会計の2人が必要でした。会計担当の竹岡さんは「残額が多い自治会には、会員にマスクや防災用品を配布して還元していったので、会計を統合するまでに2年かかった。」と、話しておられました。

■自治会員の不安を払拭する「会長見習い制度」の導入

統合後の自治会では、役員負担を減らす「会長見習い制度」を導入しています。この制度は、会長を2年任期の2名体制とし、その内1名が1年ずつずれて交代していくもので、1年目は見習い会長として自治会の活動に参加します。樋口会長はこの制度について「ソフトな運用を意識している。」と、話します。例えば、見習い会長は、会議や行事への参加を強制されることはありません。こうすることで、固くなりすぎず、気軽に参加しやすい雰囲気を作っています。1年間ゆるく活動に参加しながら、会長の役割を学んだり、自治会相談役や自治会メンバーとの関係を築くことで、会長になったときの不安を払拭することができます。

POINT

取材に同席した立命館大学の稲葉教授は、東自治会の組織統合は「実践共同体(COP)」の取り組みとして捉えて「会長見習い制度は、先生と生徒という関係ではなく、古参者が教え、新参者が新しい意見を言い、お互いに良いやり取りを行うことで、対等な立場で社会的に大事なことを実践している。みんなが対等にやれることをやり、自治会の構成図を上下関係から実践共同体に変えていく取り組みで、今後の活動が楽しみ。」と、話してくれました。

自治会運営として「地域イベント」をどう継続させていくか

今後の展望として、齊藤さんは「大池まつりなどの地域のイベントの運営を、地元の学生にぜひお手伝いしてほしいと思っている。大学のサークルや近隣の高校の部活動との連携を深め、持続可能な運営を目指していきたい。」と、話してくれました。

地区の大人だけで運営し、参加者を楽しませるのではなく、地域の学生が放課後の隙間時間等を活用し、地区全体で取り組んでいくことが、今後の地域イベントの継承に繋がっていきます。



取材の様子

組織活性化に関するその他の工夫した取り組み

東自治会では、他にも様々な取り組みを行っています。

- 原則、80歳以上の方や障害をお持ちの方は、役員を免除。
- 自治会が管理する防犯灯の管理費は、自治会未加入の方にも呼び掛けています。

■取材を受けた地域の方から一言

大池2丁目東自治会 樋口会長

組織変更され4年目の会長役を預かっています。2年間はコロナ禍で多くの行事が中止でしたが、今年は結構復活してきています。2年間のブランクは大きく、実施となると迷うことも。結局、初代会長の齊藤さんに教えを乞いながら進めているところです。見習い制度に加え、今年は特に相談役が大きな力になっています。

大池2丁目東自治会 齊藤さん(写真前列)

学生さんが自治会について関心を持ってくれたことは、大変嬉しいです。若い世代がどの様に考えているのか、貴重な意見を聞くことができました。また、これからの課題の解決策などの意見を出してくれたのも取り入れ、どの世代も交流できて助け合える自治会になればと思います。



取材後の集合写真

■取材をした学生から一言

立命館大学政策科学部 小久保さん(写真後列左)

会長の見習い制度や大池まつりについてお話を伺い、制度やイベント、大人や子どもといった年齢に関わらず、自治会全体のつながりを大切にされている地域であると感じました。地域全体でつながりを大切にするのが、今後の自治会のあるべき姿を作り出していることを学ぶことができました。

立命館大学政策科学部 藤井さん(写真後列中央)

会長の負担を、ソフトな人間関係を作ることで減らそうとする工夫は印象的でした。見習い制度のように、一人で抱え込まず気軽に相談できる人間関係によって、会長等の役職の負担を減らすことにつながることを学びました。

立命館大学政策科学部 石橋さん(写真後列右)

自治会の統合に成功している点はかなり素晴らしいと思いました。更にアンケートを工夫することで、回答率を上昇させたことは自分自身も見習わないといけないと感じました。大学生の意見を積極的に取り入れようという姿勢が素晴らしく、新しい事へと挑戦できる素敵な心構えだと感じました。

豊川地区まちづくり協議会

持続可能な地域交流・対話に向けて 地域独自でワークショップを開催

～地域活動の担い手とリーダーを育成する～

豊川地区まちづくり協議会(以下、「協議会」)では、「地域の担い手の創出、次世代の地域リーダーの育成」に繋げることを目的に、地域主催でワークショップ(以下、「WS」)を開催しました。

■地域課題解決に向けて実施した”市主催 WS”

豊川地区では、地域の課題を解決し、地域活動をさらに活性化させていくために、茨木市が市内の各地区で実施している「地域活動の活性化に向けたWS」を、令和3年度に実施しました。

WSでは、少人数のグループに分かれて、各グループにはファシリテーターと呼ばれる話し合いのサポート役が同席し、いつもの会議とは違う和気あいあいとした雰囲気で行なわれ、話し合いを進めていきます。

豊川地区では、全3回のWSを通して、これまでとは違う話し合いの手法を体験するとともに、地域の方同士の交流を深め、次年度以降に取り組んでいきたいアイデアをまとめることが出来ました。

WS終了後のアンケートでは、「参加してよかった」「継続して取り組みを進めていきたい」と、ほとんどの方が回答されました。

■”地域独自のWS実施”そのきっかけは?!

令和3年度のWSの中で、「日常の買い物に困っている高齢者の方を、乗り合いタクシーで近隣のスーパーまで送迎するツアーを実施しよう」というアイデアを出された方がいました。この取組みは、令和4年度に地区の福祉委員会によって実現され、今は月に2回ほど実施しています。協議会の小山さんは「乗り合いタクシーのアイデアを提案した方が、WSで自分が出したアイデアが実現したことにすごく感動したと言いに来てくれた。この時、自分のアイデアが実現する感動を多くの方に感じてもらえれば、地域活動のやりがいにつながるのではと思った。」と、話します。

豊川地区では、令和4年度、コロナの影響で運動会やコミセンまつりが中止になり、それに代わる地域イベントを実施したいと考えていたので、提案から実現のプロセスを多くの方に感じてもらえるWSを、地域独自で実施することにしました。

イバマチ編集会議メンバーの学生も地域のWSに参加し、学生視点でアイデアを提案しました!



令和4年度WSの様子

■継続した”協議の場”づくりのために工夫したこと

令和3年度のWSでは、市が手配したファシリテーターが各テーブルに入り、進行役を務めました。今回は自分たちで1から作る手作りのWSなので、様々な工夫をしました。

POINT

まずは、自分たちでできること、委託して手伝ってもらうことについて整理しました。各テーブルに入るファシリテーターは地域住民が担当することで、経費を削減でき、次世代の地域リーダーの発掘にもつながる可能性もあり、一石二鳥となることに気が付きました。

そこで、地域住民がファシリテーターを担当できるようにするため、外部に委託して「ファシリテーター養成講座」を実施し、役割や当日の振る舞いを学んでから当日のWSに臨みました。

また、WSへの参加については、若い方やこれまであまり地域活動に参加していない人に参加してもらうために、地域でチラシを作成し、市の広報誌(8月号)に織り込んで地区内に全戸配布しました。結果的には、各回30名ほどが参加し、前回のWSの参加者とは違ったメンバーで話し合いをすることができました。

今回のWSには地域の企業で働く人も参加しており「これまでに協議会と連携している企業もあるが、今回のWSをきっかけに、もっと企業とも連携していきたい。」また、「地域住民がファシリテーターを担当し、無事にWSを終えることができたので、今後もWS形式での意見交換を積極的に行っていきたい。」と、中村会長は、今後の抱負を話しておられました。



地域独自のWSの結果を踏まえて、地域の子どもが楽しめる新たなイベントを11月に実施しました。

■取材を受けた地域の方から一言

豊川地区まちづくり協議会 小山さん(写真一番左)

学生さんたちもWSに参加していただき、外からの目で地域を見た時、住民では気づくことのできなかった魅力や、情報発信のアイデアを出して頂きました。それを参考にしながらまちづくりに生かしていきたいと思えます。

■取材をした学生から一言

立命館大学産業社会学部 奥道さん(写真中央)

WSに参加させていただき、地域を自分たちで盛り上げようとする熱量が伝わってきました。全体の雰囲気良く、意見を出しやすい環境だったことが、WSの成功に繋がったと思います。

立命館大学政策科学部 山本さん(写真一番右)

イベント開催の結果を重視するのではなく、WS等での地域住民の交流やリーダー発掘という目的を大切にしているところが、とても良い地域だなと思いました。役員が高齢化しているという課題に対して、若い人材の力が重要だとお聞きしたので、学生や若者が地域に来てもらえるようになると良いなと思いました。

立命館大学政策科学部 小谷さん(写真右から二番目)

WS等をはじめ、イベントまでのプロセスを特に大切に考えておられると感じました。今回お聞きしたような活動の継続が、地域で目標としている地域間交流や次世代育成に向けて、大きな一歩となっていくのではないかと思います。



取材後の集合写真

玉櫛小学校区地域協議会

「SLまつり」がつなぐ地域の輪

～「デゴイチ」を活かして世代を超えた交流を～

玉櫛コミュニティーセンターの敷地には、SLが設置されており、地域のシンボルになっています。玉櫛地区では、SLをみんなに知ってもらうためのイベントとして、「SLまつり」を毎年6月に開催しており、令和4年度もコロナ対策を講じておまつりを開催しました。

■地域のシンボル「デゴイチ」を活かしたSLまつり！

玉櫛コミュニティーセンターの敷地に設置されているD51型蒸気機関車、通称「デゴイチ」は、保存状態が非常に良く、信号機や踏切も揃っており、遠方から鉄道ファンが訪れることもあります。

玉櫛小学校区地域協議会(以下、「協議会」)では、地域の子も達にSLを知ってもらい、地域に愛着をもってもらうために、令和元年度から「SLまつり」を開催しています。高尾会長は「地域にこれだけ貴重なものがあるのだから、デゴイチを活かして地域の活性化ができないかといった思いや、もっと子ども達が見学できる機会を増やしてあげたいという思いがあった。」と、SLまつり開催の背景を話してくれました。



SL見学の様子

SLは、普段は柵で囲まれており、近くで見ることが出来ませんが、SLまつりの際には柵の中に入って、車内まで見学することができます。また、焼きそばやポン菓子などの出店や、ゲームコーナーなどを子どもは無料で楽しむことができ、SL缶バッジ等の記念品も配布しています。

SLまつりは、地域の子も達に大好評で、おまつりを楽しむ多くの子ども達が、イベントスタッフをしている協議会役員に「おばちゃんたちすごいね、ありがとう。」と、声をかけてくれます。こうした子ども達の声や地域の方の喜ぶ姿が、イベントをする原動力になっています。

POINT

スタッフは、日本神話に登場する玉櫛姫のイラスト入りTシャツを着て、一致団結して取り組んでいます！

SLまつりには、協議会の参画団体の他に、スポーツ団体やボーイスカウト、南中フェスタなどの子ども向けのイベントを企画運営した経験があるスタッフが入っており、各組織のノウハウを持ち寄りながら運営を行っています。子ども達がイベントを通して、楽しみながら、地域の様々な方と交流できる機会となっています。

■活動継続に向けて、前向きにチャレンジ！つながりの輪をひろげていく

今後の目標について高尾会長は「少しずつSLまつりの規模を大きくし、地域の人に限定しないイベントにしていきたいと思っている。大学生など、若い方と積極的につながりを持ち、若者の意見を取り入れた企画やイベントをどんどん実施していきたい。」と、話します。

しかし、地域のイベントを継続し、目標を実現するためには、2つの課題があります。1つ目は、地域活動への若者の参加率が低く、役員が高齢化していること、2つ目は予算についてです。地域の担い手は高齢化しており、今後、まちづくりに携わることができる担い手がさらに高齢化し、若い担い手が

入ってこなければ、イベントは実施できなくなってしまう。予算については、SLまつりを地域外の子どもやSL好きの人など、様々な人に参加してもらえるイベントにしていく場合は、これまでのように無償で続けることは難しく、参加者からお金をもらうことも考えていかなければなりません。

高尾会長は「地域で新しいことを始めようとすると、成功するか失敗するかもわからないし、負担も大きい。やってみたが全然ダメということもあるが、イベントが成功するかどうよりも、新しいチャレンジに向けて、地域の人が話し合って一緒に考えるプロセスが最も大事」と、話します。今後もこの考え方のもと、協議会のチャレンジは続いて行きます。



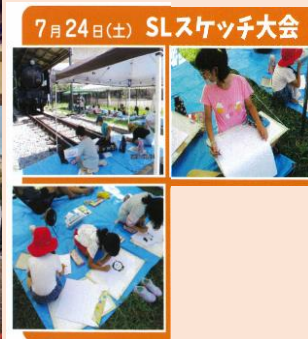
取材後に、デゴイチを見学させていただきました

SLを活かしたその他の工夫した取組み

- SLスケッチ大会
 - ・SLまつりの前に、コミセンでSLのスケッチ大会を実施し、小学生にSLを間近に見てもらう機会を設けています。
- SLイルミネーション
 - ・新たな取組みとして、令和4年度からSLをライトアップして、SLの新しい魅せ方にチャレンジしています！
- SL見学会
 - ・SLまつりとは別に、見学会を年に6回実施してSLに触れる機会を増やしています。



ライトアップされたデゴイチ



スケッチ大会の様子

■取材を受けた地域の方から一言

玉櫛小学校区地域協議会 高尾会長（写真後列一番左）

コロナ禍のなかで、地域行事を実施することは大変な状況です。テレワークなど新しいライフスタイルが求められる時代に合わせ、出来る限りの感染対策をとり、各種の事業を進めて行きたいと思っています。取材に来られた学生さんの熱意に負けず、地域の皆さんの顔が見える楽しい地域活動を目指して頑張ります。

■取材をした学生から一言

立命館大学政策科学部 藤井さん（写真前列一番左）

私たちの日常は地域協議会の方々のような存在によって支えられていることを実感しました。また、少子高齢化等のような社会的な課題に直面しながらも、具体的な策を考えながら活動されていることをとても心強く思うとともに、私たちも考えて協力していかなければならないと感じました。

立命館大学政策科学部 山本さん（写真前列中央）

「地域でのイベント開催では、結果よりもそこまでの過程における地域住民の交流が大事である」との会長の言葉がとても印象に残りました。地域を大切にする気持ちが伝わってきて、若い世代も地域活動に協力するべきだと感じました。

立命館大学産業社会学部 奥道さん（写真前列一番右）

私たちが思っている以上に、地域の方々自分たちの地域を大事にされていると感じました。地域にあるものを活用することの大切さ、保管や継承をしていく難しさを知ることができました。



取材後の集合写真

大岩自治会

地域の安全を守る「大岩パトロール隊」

～地域交流で育んだ団結力で、わが町を守る～

大岩地区では、犯罪を抑止し、恵まれた自然環境を守るため、大岩自治会内で「大岩パトロール隊(以下、「OP隊」)」を結成し、定期的なパトロールや、災害発生時の臨時パトロールを実施しています。

■大岩パトロール隊発足～わが町は自分たちで守る～

OP隊は、平成14年に地域の安全・安心なまちづくりをめざして発足しました。平成10年頃から地域内で農機具の盗難や、電化製品等の不法投棄が頻発していたことが発足のきっかけです。警察に任せきりにするのではなく、「わが町は自分たちで守る」という意識で活動に取り組んでいます。

大岩自治会の役員に、地元消防団員を加えた26名体制で活動しており、当初は大岩地区だけで活動していましたが、現在は山三地区(清溪(きよたに)、見山、石河)に活動の範囲を広げています。

■パトロール隊が担う地域を守る2つの役割

OP隊には、大きく2つの役割があります。1つ目は、犯罪抑止です。青色パトカー(以下、「青パト」)と徒歩で、地区の見回りを行い、不法投棄物を発見した際には、警察と連携して徹底的に調査を行います。実際に、OP隊の調査から検挙に至ったこともあります。

青パトは、現在7台が稼働しており、隊員の自家用車を使用しています。月に1回、全青パトが出動し、定期パトロールを行っているほか、不審者に情報を知られないように臨時パトロールも不定期で実施しています。そのほか、登下校時の子どもの見守りも実施しており、地域での犯罪の抑止や子ども達の安全に貢献しています。

2つ目は、環境の保全です。台風などの自然災害によって倒木が発生した際、他の地域では、市や府に連絡をし、対処を待つこととなりますが、大岩地区ではOP隊のメンバーを中心に、通勤通学時間までに地域で対処し、交通障害となるような状況を取り除いています。

山間部の地域で、農業や林業で扱う資機材を持っている隊員が多いからこそ、このような環境保全活動を行うことができています。



定期パトロールの様子

倒木の処理だけでなく、倒木の危険性のある木を切ったり、地域の危険箇所を整備したりもしています！

POINT

OP隊は、普段から石河駐在所の警察官と一緒に活動し、密にコミュニケーションをとっているため、有事の際にも速やかに連携をとることができます。また、地域住民の繋がりが深く、日頃から「顔が見える付き合い」ができており、隊員同士の得意分野や出動できる時間帯なども把握しているので、迅速な対応が可能となっています。

■ 団結力を育む「大岩太鼓」～伝統行事復活の鍵は、ソフトボール？～

大岩地区の繋がりの深さは、地区の伝統行事である「大岩太鼓」によって育まれました。大岩太鼓は、明治17年に一度途絶えましたが、昭和60年、「太鼓が残っているのに、このまま使わないのはもったいない」という地域住民の声をきっかけに、一世紀振りに復活し、その2年後の昭和62年には大岩太鼓の歴史と伝統を後世に継承していくために、大岩太鼓保存会が結成されました。

大岩太鼓復活の際には、単に復活させるというだけでは人が集まらないので、人を集めるために一計を案じました。それがソフトボールチームの結成です。ソフトボールをきっかけに人を集め、まずはスポーツの力で団結力を高め、5年ほど活動した後、満を持して大岩太鼓の復活に向けて動き出しました。

こうして復活した大岩太鼓は、今でも大岩の人たちをつなぐ大切な行事として受け継がれており、太鼓巡行の際には、大岩を離れた人も地域に帰ってきて、一緒に巡行に参加しています。

OP隊の峯顧問は、「大岩太鼓を復活できたから今のOP隊の活動がある。この活動があるからこそ、苗字ではなく、名前で呼び合う関係がOP隊の中にはできている」と、話してくれました。伝統行事を中心とした地域の交流が、OP隊の活動を支える人間関係を作りだしています。



大岩太鼓の様子

地域では高齢化が進んでおり、大岩太鼓の担い手も不足してきています。後世に活動をどのように継承していくかが今後の課題です。

発足当初からこだわっているお揃いの制服

OP隊では、発足当初から、活動の際にはお揃いの制服を着用しています。「少しでも抑止力が働けば」という思いから、警察や警備会社の制服に似たデザインとしており、時代に合わせてこれまで3回リニューアルし、昨年末には制帽を一新しました。

■取材を受けた地域の方から一言

大岩自治会 大西会長（写真後列一番左）

大岩地区は安威川ダム、新名神高速道路、彩都開発、そして約15haの営農再開等によって、今、大きく変わろうとしている一方、少子高齢化、若年層の流出による担い手不足など、中山間地共通の課題を抱えています。しかし、幸いに大岩は太鼓やOP隊、いもほり園の活動・運営により、地域住民の交流と団結が非常に強いものがあります。先祖より受け継いできた伝統行事や文化を守り継いでいくためにも、今後とも「地域交流で育んだ団結力」で、持続可能な地域づくりに取り組んでまいります。



取材後の集合写真

■取材をした学生から一言

追手門学院大学地域創造学部 大山さん（写真前列左から二番目）

OP隊の活動には、自治会や消防団などの様々な活動が重なり合っていました。それらの根底には、太鼓保存会の存在やリーダーの存在があり、太鼓保存会という地域文化を保全する活動が、地域を守るという強い結束をつくっていると知りました。

追手門学院大学地域創造学部 藤本さん（写真前列一番右）

お話を聞いていて、地域の皆さんがとても仲が良く、一致団結されていると感じました。色々な活動をされていると知ったので、実際に活動のお手伝いをしたいと思いました。

立命館大学政策科学部 宮本さん（写真前列右から二番目）

「何があっても助けあえる」と話されていたのが、とても印象的でした。お話を伺う中で、地域や伝統を守るという、強い絆を感じました。私もそんな風に地域と関わりたいなと思いました。

橋の内自治会

防災意識を高める「防災看板」の設置

～幅広く地域の防災情報を伝えることをめざして～

橋の内自治会は茨木市でも最大規模の自治会で、加入世帯数は1,000世帯を超えています。橋の内自治会では、自治会独自の防災対策として、地域内の目立つ場所(4か所)に、防災情報を掲載した看板を設置しています

■防災意識向上のための看板を設置！～水害の歴史から学ぶ～

橋の内地区は、安威川沿いの地域で、昭和42年の北摂豪雨では甚大な被害を受けるなど、これまで何度か水害の被害を受けてきた歴史があります。そのため、水害をはじめとする災害への関心は特に高く、平成20年には、橋の内地区独自の自主防災会が組織されました。

更に、平成26年の大雨をきっかけに、防災について改めて地域で考え直す中で、自治会と別組織で防災に取り組むよりも、自治会の部会で防災に取り組む方が、より広範囲を丁寧にカバーできるとの考えから、平成29年には、これまで自治会とは別組織だった自主防災会を自治会内に取り込み、自治会の中に防災部が設置されました。そして、令和4年度には、地域内での更なる防災意識の向上のため、大雨や地震災害への備えに関する情報を掲載した防災看板を設置しました。

■看板設置に隠された狙いとは

最終的には、防災看板を設置しましたが、当初は、防災情報を記載したチラシを作成して自治会員に配布する方法を検討していました。しかし、チラシでは見ずに捨ててしまう方も多く、見ても保管する人は少ないのではないかという声があがりました。また、防災に関しては、地域住民全員に周知することが重要であり、自治会に加入していない人にも情報を共有できる看板が良いのでは、という意見もあり、必要な情報をいつでも確認できるように、地区内で交通量が多く、目立つ場所4か所に防災看板を設置しました。



設置されている防災看板

POINT

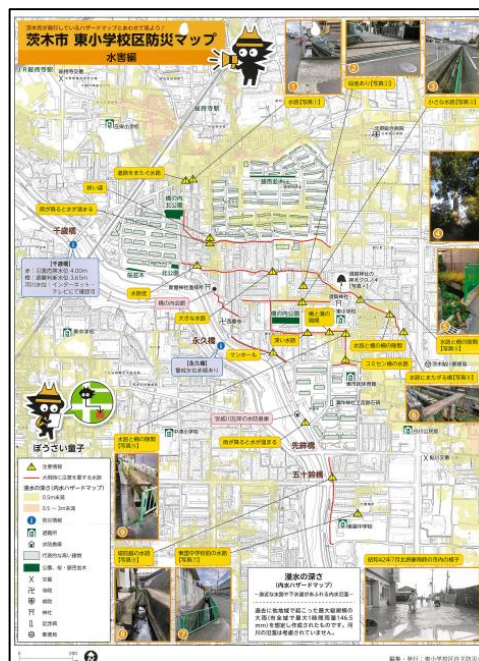
防災看板に掲載できる情報は限られているため「この情報も入れたい」、「あの情報も入れたい」と、防災部で何度も話し合いを重ね、苦労しながら看板を作成しました。看板には自治会で厳選した必要最小限の情報が掲載されており、詳しい情報は市のハザードマップやおおさか防災ネットを確認するように「QRコード」を載せています。看板をきっかけに更に詳しい情報を調べてもらえる仕掛けになっています。

■ 私たち防災部の活動テーマは、「地域で守ろう！みんなの命」

自治会の防災部では、「地域で守ろう！みんなの命」というテーマを掲げて、非常時の警戒態勢を決めたり、緊急連絡網を作成するなどして災害に備えています。また、毎年5月と10月には、傾いた電柱や水路、柵などがなく、地域内の危険箇所の点検パトロールを行っています。防災部の泉さんは「一時避難場所まで誘導すれば、そこからは市の職員の方が担当してくれるので、そこにたどり着くまでは自治会で地域の方の安全を守りたいという思いで活動している。」と、話してくれました。

今後、橋の内自治会では、防災看板の増設を予定しています。また、今後は、「楽しい防災」をテーマに取り組んでいきたいと考えており、「現在行っている防災訓練などとは別に、地域の子も達が防災に関心を持ってもらえるような別の取組みを考えていきたい」と、小林会長は話していました。

さらに、学生と連携し、オンラインの手法なども活用しながら活動の幅を広げていくことで、地域を活性化させていきたいとも話してくれました。



東小学校区防災マップ

防災に関するその他の工夫した取組み

● 東小学校区防災マップの作成

橋の内自治会も所属する「東小学校区自主防災会」では、身近な水路や下水道が溢れる「内水氾濫」を想定して「東小学校区防災マップ」を作成しています。

これを見れば、安威川が氾濫しなくても浸水する危険性のある場所が分かるようになっています。

■ 取材を受けた地域の方から一言

橋の内自治会 泉氏（写真後列右から三番目）

橋の内自治会の防災部を設置して15年。自治会の防災部は、東小学校区自主防災会と連携し、地域の防災意識向上のために取組みを進めてきました。平成30年の大阪北部地震後、防災看板の必要性を感じていました。防災看板を設置することができ、嬉しいです。これからも地域の絆を深める取組みを推進します。

■ 取材をした学生から一言

追手門学院大学地域創造学部 大山さん（写真後列左から二番目）

自分たちに必要なことを自分たちで行っていくという意識が高い地域だと思いました。その上で、行政や大学などと連携をとり、専門的な知識も入れて活動を行っており、規模の大きい自治会ですが、工夫を行い広域的にカバーしていこうと活動されていると感じました。

立命館大学政策科学部 板坂さん（写真後列左から三番目）

自分たちの地域で今何をすべきなのか、という考えをしっかりとっておられ、それを突き通す姿勢にとっても感銘を受けました。このまま防災に関する知識が地域に浸透していけばいいなと思いました。



取材後の集合写真

葦原地区自主防災会

作り手の思いを込めた「自主防災会だより」

～啓発活動を継続して、防災意識の向上へ～

茨木市には「自分たちのまちは自分たちで守る」という地域住民の自衛と連帯意識に基づき、30の自主防災組織が結成されています。平成20年6月に結成された「葦原地区自主防災会(以下「防災会」)」では、地域の防災意識を高めるために「葦原地区自主防災会だより(以下「防災会だより」)」を作成し、葦原地区の全戸に配布しています。

■ 誰かの命を救うきっかけに。思いを込めた「自主防災会だより」

葦原地区は茨木市でも最も土地が低い地域の1つで、昭和10年、昭和42年には地区全体が浸水するなど、水害の被害を多く受けてきました。「こうした過去の経験から、葦原地区は災害に備える意識が高い」と、矢頭会長は話します。「防災会だより」を作成するにあたっては、防災会の2名の役員が中心となり、新聞に掲載されている防災の記事をピックアップしたり、他市の防災センターに足を運んで視察を行うなどして、地域の方に伝えたい情報を収集しています。また、地域で行った防災訓練の様子や、終了後のアンケート結果も掲載し、地区内で情報共有を図っています。



自主防災会だより

問題

防災会だよりで特に好評なのは、防災に関する知識を楽しんで学べるクイズコーナーです。

問題 1. 屋内で緊急地震速報が鳴ったら必ず机の下に避難する。○か×か？

POINT

防災会だよりは、原稿作成、こだわりの編集など、約1か月をかけて作成されており、作成者の「是非これは伝えたい、知ってほしい」という想いが詰まった内容になっています。

また、重要な情報や「これは必ず知っておいてほしい」ということは、意識づけのために、何度も繰り返し記事に掲載するなどの工夫をしています。

編集担当の前田さんは、作成の際の思いとして「ひとつの言葉で誰かの命を救うことができる一方で、誤解に繋がる可能性もあるので、文章の伝え方はこだわっている」と、話してくれました。

■ 幅広い人々を対象に防災の心がけを伝える葦原地区自主防災会

防災会では、防災会だよりの発行だけでなく、対面式の防災啓発活動や、災害発生に備えた対策などにも積極的に取り組んでいます。

その1つが、イエローボードの取り組みです。防災会では、災害発生時に家の前に掲示することで、近隣住民に無事を知らせるための「イエローボード」を作成し、全戸に配布、災害時に使用してもらうための啓発を行っています。平成30年6月18日に発生した大阪北部地震の際には、地域内でイエローボードが実際に活用されました。



配布しているイエローボード

★ちなみに、クイズの答えは × が正解です！

また、防災会では、葦原小学校の4年生を対象とした防災教室の取組みにも力を入れています。防災教室は、地域の子も達が防災意識を高め、いざという時には自分の身を自分で守ってほしい、という思いから始まった取組みで、シェイクアウト訓練や消火器訓練、煙で前が見えない中での避難などの普段できない貴重な体験をしてもらっています。



防災教室の煙体験

大阪北部地震後の防災訓練では、参加者から家具の転倒防止対策などについて質問があり、防災会の方は、住民の防災意識の向上を実感されたそうです。継続した情報発信や防災意識を高めるための様々な活動の効果が出てきているのかもしれません。

防災に関するその他の工夫した取組み

●外国人向け防災教室への参加

茨木市が沢良宜いのち・愛・ゆめセンターで実施している外国人向け防災教室には、自主防災会の防災士がオブザーバーとして参加しています。



■つながりの大切さを伝えたい！未来の防災のための人材育成と連携強化へ

防災会だよりについては、「学生や若い方の意見を取り入れて作っていきたい」と、今後の展望を話してくれました。また、災害時の重量物の移動訓練などが行えるよう、企業の参加を促進するとともに、外国の方への防災情報の伝え方の工夫や、災害支援、防災士の育成にも取り組みたいと考えています。

「今後は中学校区に活動を広げ、自治会・各種団体の活動の幅も広げながら、自治会への加入促進などをすることで、災害時の横の連携を強めていきたい。」と、矢頭会長は話してくれました。

■取材を受けた地域の方から一言

葦原地区自主防災会 矢頭会長（写真中央）

阪神淡路大震災から28年になります。今回取材された学生の皆さんは、まだ生まれてはいませんが、言葉のはしほしに防災意識の高さが見られました。災害に対しては、「自助・共助・公助」が必要です。特に「共助」は地域で助け合うという意味で自主防災組織が必要不可欠です。学生の皆さんの若い力と経験を生かした我々と、今後もタッグを組んでいきたいと思えます。



取材後の集合写真

■取材をした学生から一言

立命館大学政策科学部 小川さん（写真一番左）

災害時、困ったときは助け合うことが大切ですが、誰かを助けるためにも知識を持つ必要があると感じました。防災会の皆さんは、関心をもってもらうことを第一に子どもから外国の方々まで幅広く発信しています。今後、防災の意識がより高まっていくことを願いたいと思いました。

立命館大学政策科学部 森さん（写真左から二番目）

様々な形で地域防災に取り組まれていることを知り、私自身も防災を考える機会になりました。いずれ起きてしまう災害から目を背けず、備えることの大切さを改めて感じました。

立命館大学政策科学部 宮本さん（写真一番右）

災害の時に問われるのが、本当の地域のつながりの力です。この自主防災会だよりが、地域と人をつなげ、日ごろから防災への意識を高める、大切な役割を果たしていると感じました。

追手門学院大学地域創造学部 中村さん（写真右から二番目）

自主防災会を今回の取材で初めて知った私にとって、防災会だよりは地域にとって安心する防災の取組みの一つであり、取組みを他地域に発信することが大事だと感じました。

安威北部自治会

ごみの適正排出に向けた啓発活動

～誰もが住みよいまちをめざして～

安威北部自治会では、ごみ置き場におけるカラスの被害や回収不能ごみを防ぐために、自治会を中心に、ごみ出しのマナー向上に向けた取組みを実施しています。

回収不能な粗大ごみを減らすために、地域がしたことって？

安威北部自治会のごみステーションには、以前より、回収不能な粗大ごみが散見されていました。令和2年4月に「何か自治会として対策が取れないか？」と、検討を始め、まずはどのようなごみが回収されずにごみステーションに残っているのかを調査しました。調査をする中で、「これも回収不能ごみなのか、知らなかった」と、自治会役員自身が感じることもあり、そもそも正しいごみ出しのルールが認知されていないのでは、と考えるようになりました。



ごみ出しルールを記載したチラシ

そこで、自治会で相談した結果、まずはごみ出しのルールについて、住民に回覧とチラシで周知を行うこととしました。また、ごみ出しの時間帯には、自治会役員がごみステーションを分担して回り、住民の方に声掛けを行って積極的に周知しました。

ごみ置き場でカラス被害が発生！できることからすぐに行動！

ごみ出しのルールについて周知を続けている中、令和3年に入ってから、各ごみステーションでカラスがごみ袋を頻繁に荒らすようになりました。そこで、地区内の16のごみステーションの実態を把握した後に、下記の対策を講じました。

試行錯誤して、わかった！効果のあるカラス対策

- **効果のあった対策**→防鳥ネットの中にごみを確実に収めることが重要！
 - ・防鳥ネットに収まりきらない量のごみが出されていたので、新たなごみステーションを設置。利用者数を調整してごみの量を削減。
 - ・防鳥ネットの中にカラスが入りにくいようにするため、市から貸与される防鳥ネットを2枚つなぎ合わせて使用。それに加えて、約1mの丸太でネットをしっかりと押さえる。
- **あまり効果がなかった対策**
 - ・水を入れた2ℓのペットボトルでネットを押さえる。⇒沢山のペットボトルを使っても押さえきれない部分があり、カラスが進入する。
 - ・カラスのカカシを設置！（効果があったのは最初のうちだけ）



カラス被害については今でも時々発生しますが、試行錯誤して対策した結果、徐々に被害は減っています。

POINT

安威北部自治会では、問題が発生したときにまずは実態を調査し、対策を考えたいうえで周知を行うなど、丁寧なプロセスで課題解決に取り組んでいます。住民への声掛けも「注意」ではなく、会話をしながら丁寧に説明しており、声を掛けられた方にルールを理解してもらうよう心掛けています。

■誰もが住みよいまちにしていくため、私たちが取り組みたいこと

これまでごみの適正排出に向けて、ごみ出しルールの周知やカラス対策の取り組みを行ってきました。乾会長は「ごみの適正排出に向けた周知活動を行っているが、回覧、チラシ、掲示板は1度見ると意識して見るのが減ってくる。日頃から直接声掛けをすることが最も効果的だと思っている」と、話してくれました。

また、周知活動だけではなく、活動している姿を実際に見てもらい、少しでも協力しようと思う人を増やしたいという思いで、役員や廃棄物減量等推進員が、カラス被害を受けたごみステーションの清掃も行っています。

「何事も継続して取り組むことが重要」と話す役員の方皆さん。

今後も、ごみ出しのマナー向上に向けた安威北部自治会の取り組みは続いていきます。



取材後には、カラスのカカシや防鳥ネット、啓発ポスターなどを見せていただきました！

地域と学生が交流したことによって、新しい取組みにつながりました！



取材の中で、学生から「禁止事項や注意を呼び掛けるチラシだけでなく、ルールを守ってくれた方に感謝を伝えるチラシを作ってはどうか」と提案があり、学生がチラシを作成しました。現在、学生作のチラシが、安威北部地区のごみステーションに実際に掲示されています。

“誰かが見てくれている”というメッセージを伝えるために、顔のあるキャラクターを使っています。（立命館大学 渡邊さん）

■取材を受けた地域の方から一言

安威北部自治会 会長

3年間を目途に始めた取組みも、最終年度が終わろうとしています。ごみ捨ての課題も当初と比べて、随分と改善されました。回収不能の粗大ごみが出ることはほぼ無くなり、カラス被害も短時間の内に片付けて頂けるようになりました。地域の皆様、廃棄物減量等推進員の皆様、いつもきれいにありがとう。取組みはもう2年間延長の予定です。

■取材をした学生から一言

立命館大学政策科学部 渡邊さん（写真後列左）

住民が正しくごみの分別ができるよう取り組まれていて、ごみの分別のためにポスターを掲示する等の工夫をされていることを知りました。地域にとって当たり前暮らしを支えている人がいることを知って、自分自身も改めて感謝する機会になりました。



取材後の集合写真

佐保自治会

「アドプト・リバー」の取組みがつなぐ地域の絆

～人も生き物も住みよいまちへ～

「アドプト・リバー・プログラム」は、大阪府が実施している河川の環境美化に関する制度です。現在、府内203箇所アドプト・リバー・プログラムが行われていますが、その先駆けとなったのは、佐保自治会が行う河川周辺の環境美化活動でした。

■大阪府下で先陣を切ったアドプト・リバー・佐保川

「アドプト・リバー・プログラム」は地元自治会等の地域の団体と、地元の市、河川管理者である大阪府の3者で協定を結び、3者が連携・協力しながら、共に河川環境の美化に取り組むことを目的としています。「アドプト」とは「養子にする」という意味で、河川を「養子」、参加する団体を「里親」にみたてており、平成13年の7月に、現在「アドプト・リバー・佐保川」と呼ばれている、佐保川の環境美化活動を認定第1号の活動としてスタートしました。

佐保地区は農業が盛んで、川の水を農業で使用するため、昔から川の水質や周辺環境についての美化意識は高い地域でした。しかし、アドプト・リバー活動をスタートした20年前は、川が汚れてきており、そんな時に、大阪府からアドプト・リバー活動について声がかかり、活動がスタートしました。

「アドプト・リバー・佐保川」では、年に1度、地区全体で、佐保地区内の免山(めざん)から馬場(ばば)までの約5kmにわたって、佐保川の中や、川周辺を掃除します。活動が始まって以降、佐保川の水質はだんだん良くなっていると地域の方は実感されており、今では、水質がキレイでないと生息できない蛍やオオサンショウウオといった生き物が、佐保川には生息しています。このような生き物が見られるのは、佐保川がキレイな証です。



アドプト・リバー・佐保川の看板



佐保川で発見されたオオサンショウウオ



「アドプト・リバー・佐保川」の様子

2年ぶりに、アドプト・リバー活動を再開

佐保川でのアドプト・リバー活動は、コロナウイルスの影響による2年間の中止期間を経て、令和4年で19回目を迎えました。

今年の活動では、自治会やこども会のほか、消防団や企業、議員を含め、200名近くが参加し、参加者からは「久しぶりの活動で充実感があつた」との声を聞くことができました。

■ 私たち佐保自治会が日頃から取り組む清掃活動

アドプト・リバー活動のみならず、佐保自治会では地区内の清掃活動に力を入れており、みちづくりという昔から続く活動があります。アドプト・リバー活動は地区全体で行うのに対して、みちづくりでは佐保地区を構成する免山、松谷(まったに)、馬場の3つの集落ごとに、路肩の側溝の清掃や草刈りを行っています。

また、地元の消防団と自治会役員が協力し、神社や9月の秋祭りの会場となる駐車場、ゲートボール場といった場所の草刈りを年に2回行っています。

POINT

集落内に川が流れているという地理的要因のほか、昔から自分たちで地域の美化活動を続けてきたことで、次世代に活動が引き継がれています。また、「自分たちで住みやすい環境を作っていく」という思いも、活動とともに引き継がれています。

■ 今後の活動継続に向けて、若者を呼び込みたい

佐保地区には、若者が少なく、新しく若い家族が引っ越してきても、自治会活動やご近所の付き合いに進んで参加することはほとんどありません。今後、若い家族にも自治会活動に参加してもらえるような環境をつくるのが、アドプト・リバーの活動を継続するうえでも重要になります。

今後の展望について、東浦会長は、「今後も活動を続けていくために、人口の増加を目指した取り組みや、人が地域に根付くようなアピールをしていきたいと考えている。」と、話します。また、「人口が増加し、人手不足から脱却できれば最善だが、アドプト・リバー活動の際には、府や市にも協力を要請し、人手不足を補いながら活動を続けていきたい」と、話していました。

■ 取材を受けた地域の方から一言

佐保自治会 東浦会長 (写真右から二番目)

毎年6月に、一級河川佐保川の清掃を行っております。コロナなどもあり、今年は3年ぶりに実施することが出来ました。ご協力いただきました皆様へ感謝申し上げます。程よい開発と、自然のマッチングが私たちの願いです。今後とも綺麗な水と空気を守っていきます。

■ 取材をした学生から一言

立命館大学政策科学部 石橋さん (写真一番左)

コツコツと続けてこられた活動が、ある種の成果を生んでいる素晴らしい実例だと感じました。地域内の人だけでなく、行政や企業との縁を通じて続けてきた活動は今後も継続することが必要で、このように地域に還元できる活動は住民のメリットにもなりうるので、自治会の人員不足解決の糸口になると感じました。

追手門学院大学地域創造学部 中村さん (写真左から二番目)

アドプト・リバーをはじめとする清掃活動によって地域の絆が生まれていることを知りました。自治会員を増やし、川を綺麗にしていきたいということで、この活動をぜひ継続していただきたいと感じました。

追手門学院大学地域創造学部 北村さん (写真一番右)

これまで大学周辺以外の地域に行ったことがなく、普段通っている茨木市内にこんなに緑が多く自然豊かな場所があると初めて知りました。茨木市内でも人口減少の課題を抱えている地域があると知り、同じ市内でも地域によって課題意識の違いもあると学びました。

佐保川を見ながら、清掃場所を教えてくださいました！



取材後の集合写真

主原町自治会

地域の憩いの場を守る清掃活動と「クリーンプロジェクトチーム」の発足

～大切な人とまちを守るために～

主原町自治会では、毎年9月に自治会独自の一斉清掃を実施しており、一斉清掃以外にも自治会で美化活動に積極的に取り組んでいます。

■公園の美しさを維持！自治会独自の一斉清掃と「クリーンプロジェクトチーム」

主原町自治会には、主原町第二児童遊園（北公園）と主原町第一児童遊園（南公園）があり、地域住民や子ども達が安心して公園を使えるように、自治会を中心に公園の美化活動に取り組んでいます。

どちらの公園にも遊具があり、保育所の子ども達がよく遊びに来ます。子ども達が笑顔で楽しそうに遊んでいる姿が「綺麗な状態を保ってあげたい」という活動継続の大きなモチベーションとなっています。

自治会集会所のある「北公園」の清掃については、平成24年に「主原町児童遊園クリーンプロジェクトチーム」を立ち上げて、7つの清掃班が当番制で清掃を実施しています（1・2月以外は毎月実施。南公園については、北公園の清掃に合わせて都度清掃）。

また、公園の美化活動だけでなく、公園と阪急線沿いを掃除する自治会独自の一斉清掃も実施しています。6月と12月の「市内一斉清掃」だけでは、間の期間が空きすぎてしまうので、中間の9月のタイミングで実施しており、令和4年9月の清掃では、90ℓのごみ袋55袋分のごみを回収しました。

公園清掃にこれほど力を入れている地域は珍しく、茨木市の中でも最も綺麗な児童遊園だと自負しています。



北公園での清掃の様子

日々の公園の清掃は大変なこともあります。花や草木が好きの方が、率先して公園の草木の水やりや手入れをしてくれるので、かなり助かっているそうです。

POINT

「主原町児童遊園クリーンプロジェクトチーム」の清掃活動は、各班の班長が中心となって、みんなで交流しながら楽しく活動を継続しています。また、一斉清掃の際は、チラシを作成して多くの人に参加してもらうように呼びかけています。

活動を継続的に実施し、活動していることを周囲の人に知ってもらうことで、公園利用者や地域住民が環境美化について意識するきっかけを作っています。

今はコロナの影響で実施できていませんが、12月の一斉清掃が終了した後は、集会所で「餅つき」を実施するなど、子どもも一緒に楽しめるような工夫もしています。

■清掃活動を通して、憩いの場を維持し安全・安心なまちをつくっていく

自治会を中心に綺麗な公園を保つことで、公園では、子ども達が笑顔で遊び、仕事などの合間に一息つかれる方もいたり、地域の憩いの場になっています。

私たちが清掃活動を続ける理由

自治会で公園の清掃を熱心に行う理由として「児童遊園の維持管理は地域で行うと決まっているが、公園を綺麗に維持していくことは、地域の治安を守ることにつながる。維持管理されていない公園では、騒音や落書きなど色々な問題が起きている所もある。」と、山本会長は清掃活動を続けて公園の美しさを維持していくことが、安全・安心で住みよいまちをつくることにつながると教えてくれました。

主原町では、大阪北部地震の影響で家が建て替わってきており、若い家族も増えています。転居してこられた方には、自治会から声掛けをして自治会へ勧誘をしており、転居してこられた若い家族も自治会に加入して、清掃活動に参加してくれています。また、主原町から地域外に転居されたあとも清掃活動に参加してくれている方もいます。

公園には自治会の集会所もあり、お花見や三世代交流餅つき大会等の自治会行事をこの場所で長年行ってきました。主原町自治会にとってこの公園は、地域の集いの場であり、楽しい思い出がたくさん詰まった場所でもあります。今後も、この大切な場所を守っていくために、主原町自治会の活動は続いていきます。

清掃活動や、公園で実施してきたイベントの写真を見せてもらいながら、説明していただきました。



■取材を受けた地域の方から一言

主原町自治会 山本会長（写真右から二番目）

若い方が自治会活動に関心をもって頂いたことに感謝しております。清掃活動を通じてみんなで協力、分担することにより、働くことの価値観を知ってもらい、日頃顔も合わせたこともない、年齢も異なる人達がともに作業をすることにより、仲間意識が芽生え、今後の自治会活動に興味を持ってもらえたならば、こんなに素晴らしいことはありません。



取材後の集合写真

■取材をした学生から一言

立命館大学政策科学部 藤井さん（写真一番左）

自治会の活動にとって、住民と顔の見える関係を作る大切さを学びました。そして、主原町自治会の活動が、取材させていただいた山本さんと安田さんの親しみやすさによって支えられているように思いました。

立命館大学政策科学部 石橋さん（写真一番右）

活動のお話を聞いて、地域のことを考えた利他の心を感じました。そのような心構えを広めるような工夫も必要であると感じました。

鉢伏山森づくりの会（岩阪自治会）

里山を「守る活動」と里山に触れて「学ぶ活動」 鉢伏山森づくりの会の発足と里山環境保全

～自然豊かな景観、里山林を取り戻したい～

岩阪地区の里山である鉢伏山では、鉢伏山森づくりの会（茨木市里山センターのボランティア団体）と岩阪自治会が協働し、登山道の整備等を行い、里山環境を保全しています。

■地域の自然を守る！里山林を取り戻す「鉢伏山森づくりの会」の発足

鉢伏山は標高299mの里山で、大阪モノレール彩都西駅から山頂まで、徒歩約1時間の距離にあり、昭和6年には朝香宮殿下もご来山された由緒ある山です。昭和30年代までは、薪を使って生活していたので、お風呂を沸かしたり、ご飯を炊いたりするために、岩阪地区の住民は日々の生活の中で山に入っていました。また、当時は松茸が山ほど採れ、炭も焼いていました。

しかし、次第に、薪を取りに山に入ることもなくなり、山腹の森林は手入れされず荒れた状態となりました。かつては360度開けていた山頂からの眺望も、木立に遮られるようになり、山の姿は変わってしまいました。

転機が訪れたのは平成19年4月のことでした。鉢伏山のすぐ近くでまちびらきされた彩都西地区で「大阪府植樹祭」が開催され、この植樹祭をきっかけに、岩阪自治会や彩都住民は、鉢伏山周辺における里山景観を保全していく必要性を強く感じました。子どもの頃は野山が遊び場だった眞並会長は、「彩都の開発に伴い、岩阪近辺の自然は減ってしまった。そんな中でも残った鉢伏山を綺麗に残していきたいという強い思いを持った。」と、話してくれました。

植樹祭のあと、平成22年4月に茨木市と岩阪自治会との間で、鉢伏山地区「茨木・ふれあいの森づくり」里山保全活動実施協定を締結し、同年6月に、茨木市、大阪府、里山サポートネット・茨木の支援を受け、「鉢伏山の景観、里山林を取り戻したい！」を合言葉に、里山保全ボランティア組織である「鉢伏山森づくりの会」を発足させ、活動をスタートしました。

POINT

眞並会長は、「ハイカーの方も多く来るので、人が安全に山を歩けるように維持管理をしており、山登りの醍醐味である山頂からの展望をよくするというのもテーマの1つ」と、教えてくれました。

里山の保全のために活動をスタートしましたが、実際に山に来る人たちも増えてきている中で、来訪者や近隣住民のために安全面だけでなく、展望も意識して活動をされています。

里山景観の保全に向けた2つの活動

- 鉢伏山森づくりの会が行う毎月の活動
 - ・毎月第二・第四土曜日に行う鉢伏山の整備活動。（登山道の草刈りや、倒木の処理・間伐等）
- 他団体と協働で行う活動
 - ・12月と1月に岩阪自治会と合同で山全体の草刈りを実施。
 - ・年に2回里山センターの管理を担う「里山サポートネット・茨木」と一緒に活動

■ 仲間の輪を広げる鉢伏山ウォーク

秋頃には、彩都西地区の福祉委員会と協働して鉢伏山ウォークを実施しています。鉢伏山ウォークは、鉢伏山の森を歩いて自然を満喫するイベントで、山周辺の散策や自然観察会などを行います。福祉委員会と共同で実施しているので、彩都の住民、特に親子連れも多数参加しており、彩都の住民に鉢伏山を身近に感じてもらうことができるイベントとなっています。



鉢伏山ウォークの様子

また、「山に入って活動してみたい」という立命館大学のボランティア団体と、4年ほど前から連携を図っており、一緒に山の草刈りを行ったり、山頂に間伐材でテーブルや椅子を作ったりして、交流を深めています。中には、大学卒業後も活動に参加してくれる方もおり、鉢伏山を大切に思う仲間の輪が、着実に広がっています。

■ あなたもぜひ、里山を守る仲間！

鉢伏山森づくりの会の現在のメンバーは25名程で、その半数が岩阪自治会の会員、それ以外は彩都の住民や茨木市外のメンバーです。新たな人材を発掘するために、鉢伏山森づくりの会では、彩都西小学校区まちづくり推進協議会の地域情報誌やホームページ(<https://www.saito-machikyo.com/鉢伏山/>)、茨木市の広報誌に記事を掲載するなど、まずは活動を知ってもらうことから始めています。



取材の前には、間近で活動を見学させてもらいました！

眞並会長は「開発の進んだ彩都のすぐ近くに里山があるのは貴重だと思うので、住宅街に近い里山としてもっと親しんでもらい、将来的には彩都全体の森林公園のような山にしていきたい。」また、「学生と一緒にいるような、間伐材を使った登山道整備(階段づくりなど)の機会をもっと増やし、子どもや親子に鉢伏山を知ってもらいたい」と、話してくれました。

■ 取材を受けた地域の方から一言

鉢伏山森づくりの会・岩阪自治会 眞並会長 (写真一番右)

鉢伏山は2018年の台風で人工林の檜が数百本も倒れました。風倒木を伐って山を整備し、そこに広葉樹や花木を植樹する計画を進めています。森づくりは多くの人が力を合わせる必要があります。何世代にもわたって受け継いでゆくべき仕事です。十年先、百年先を見据えて夢を描き、一緒に里山を育てていきましょう。



取材後の集合写真

■ 取材をした学生から一言

立命館大学政策科学部 藤井さん (写真一番左)

自治会の方が山に入り木を伐採したりすることで、里山の環境を保全していることに驚きました。活動の一部を体験させていただくと、力仕事で大変な作業でした。しかし、取材を通して自治会の皆さんが自然を楽しみながら活動しているように感じました。

立命館大学政策科学部 奥道さん (写真左から二番目)

山の管理は、市が要請して業者が行っていると思っていましたが、実際は地元の方々が行っていると知り驚きました。実際に山を登り、活動を見学してみて活動の大変さを身に染みて感じました。

立命館大学政策科学部 板坂さん (写真右から二番目)

実際に山に登って、インタビューし、環境保全活動を見ることで活動している人たちの思いであったり、苦労がわかりました。登ってみてとても景色がよく気持ちよかったです。

イバマチ編集会議の取組み経過

～地域と学生が知って、学んで、つながる事例集の作成に向けて～

市内大学に通う学生で構成した「イバマチ編集会議」のメンバーで、地域課題の解決に向けて、創意工夫した取組みを行う市内13組織の取材を行い、学生が中心となって事例集を作成しました。

「住みたい・住み続けたいまちづくり大百科」という事例集のタイトルも、学生からの提案内容を踏まえて、令和3年度の事例集作成時に決定したものです。

■取組みの経過

時期	項目	主な活動内容
2022年 4月	自治会長説明会で事例の紹介	・年度当初に実施した自治会長説明会において、令和3年度に作成した事例集の事例を、学生から地域に紹介
2022年 4月～6月	メンバーの募集	・茨木市が大学包括連携協定を締結している大学を対象に、募集チラシを配布し、メンバーを募集
2022年 6月	第1回イバマチ編集会議	・応募者を対象に、イバマチ編集会議の説明会を実施 ・活動内容の説明、取材方法や接遇についての研修を行った。
2022年 7月～10月	地域への取材	・学生取材班と事務局で、創意工夫した取組みを行う13組織を取材 ・学生は、インタビュアーと記録係の役割を担った。 ・取材終了後は、取材内容を取材班で共有し、学生が事例集の原稿を作成
2022年 11月	第2回イバマチ編集会議	・原稿内容や表紙デザインについて、ワークショップ形式で意見交換を行った。
2022年 11月～ 2023年 1月	事例集表紙デザインを検討	・第2回イバマチ編集会議の意見をもとに、学生が表紙デザイン案を作成 ・表紙は「大百科」という事例集のタイトルになぞらえ、たくさんの地域のアイデアが、本からあふれ出るデザインとなっている。 ・裏表紙の事例集を手渡すデザインには、「この事例集がバトンのように地域で引継がれ、各地域に工夫した取組みが広がり、続いていってほしい」という思いが込められている。
2023年 2月	第3回イバマチ編集会議	・3月の報告会に向け、発表内容の確認、発表練習を行った。
2023年 3月	報告会	・報告会において、学生から地域の方々に、取材した地域の事例について報告



イバマチ編集会議ロゴマーク

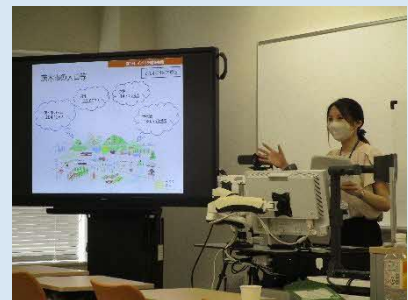


イバマチ編集会議 2022 メンバー名刺

イバマチ編集会議2022活動写真

イバマチ編集会議 2022

第1回(追手門学院大学と立命館大学で開催)



第2回(茨木市立男女共生センター ローズWAMで開催)



第3回(茨木市立男女共生センター ローズWAMで開催)



取材の様子



地域と学生の新たな連携事業 「次なる茨木まちづくりアイデア検討会議」

～「地域と学生が共に考え、取り組む」次のステージへ～

事例集作成にあたり、学生と地域に取材に伺う中で、地域の皆さんから「取材だけでなく、学生ともっと連携したい」、「学生と一緒に考え、活動したい」というお声を多くいただきました。

そこで、今年度は、学生と地域が「知って・学んで・つながる」ことから一歩進み、地域活動について「一緒に考え、取り組む」機会である「次なる茨木まちづくりアイデア検討会議(以下、検討会議という。)」を実施しました。

検討会議の実施にあたっては、中津小学校区地域協議会のご協力をいただき、中津地区において令和4年12月に実施された「中津ウォークラリー」に、企画段階から参画させていただき、地域の声を学生が聞いた上で、地域のニーズや課題に対して学生からのアイデアを提案したり、チラシの作成に関わるなどして、地域と学生と一緒にイベントを作りあげました。

■取組みの経過

時期	項目	主な活動内容
2022年 9月	メンバーの募集	・令和3年・4年のイバマチ編集会議メンバーを中心に参加者を募り、立命館大学・追手門学院大学の7名の学生が活動に参加
2022年 10月	第1回検討会議	・地域と学生の顔合わせ ・まずは学生が地域のことを知るために、中津地区をまちあるき ・学生が事前に作成したチラシ案や、ウォークラリーで実施する企画について意見交換を行った。
2022年 11月	学生による アイデア検討 ミーティング	・3つの班に分かれ、班ごとにオンラインミーティング等を行いながら、地域に提案する企画案を検討 ・最終的に、クイズラリーや、与えられたお題で写真撮影を行うゲームなどを地域に提案した。
2022年 11月	第2回検討会議	・学生が考えた企画をブラッシュアップするワークショップを実施 ・地域と学生が3つの班に分かれ、企画案について意見交換をしながら、当日実施する企画を深めていった。
2022年 12月	中津ウォークラリー 一開催	・令和4年12月11日にウォークラリーを実施。当日は、学生のアイデアをもとに作成したチラシの効果もあり、93名の方が参加され、6班に分かれて中津のまちを歩いた。 ・学生は、参加者に対してウォークラリーで行う企画の説明を行ったほか、各班に入って地域の方との交流を楽しみながら、各班の班長をサポートする役割を担った。 ・ウォークラリー終了後、協議会の役員の方と学生が、当日の振り返りと、次回ウォークラリーに向けての意見交換を行った。

次なる茨木まちづくりアイデア検討会議の活動写真

ステップ1「まちを知る、一緒に考える」第1回次なる茨木まちづくりアイデア検討会議

●まちあるき & 学生からの企画提案に向けた意見交換



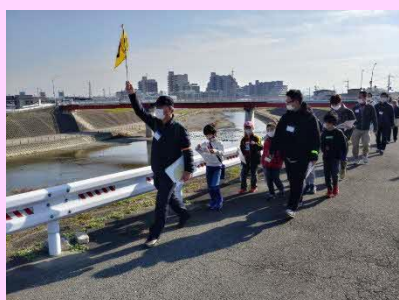
ステップ2「アイデアを深める」第2回次なる茨木まちづくりアイデア検討会議

●学生が提案した企画案について、ワークショップ形式で意見交換



ステップ3「アイデアを実現する」イベントの開催 中津ウォークラリー

●協議会役員と学生が協力し、イベントを運営 & 終了後に振り返りと次回に向けた意見交換



学生のアイデアをもとに、チラシを作成しました!

イバマチ編集会議に参加して、私が感じたこと (参加学生コメント集)

「イバマチ編集会議 2022」のメンバーが、今回の活動に参加して感じたことを書いてくれました。

自分の価値観が変わったイバマチ編集会議	地域の裏側を知れた取材
<p>自治会の皆さんの取組みを取材することで地域コミュニティの重要性をより顕著に感じることができました。様々な考えや想いに触れることができ、自分自身の価値観の深度を深めることにも繋がりました。この活動で得られた経験を活かして、地域との関わりを深めていきたいと思いました。</p> <p>立命館大学政策科学部／石橋 宙樹</p>	<p>私は4地域の取材と、中津地域のウォークラリーに参加させていただきました。その中で、地域への想いや取組みの熱量をどの地域もすごく持っており、自分たちの生活はこのような人たちに支えてもらっているのだと改めて実感しました。今後、地域活動にもっと参加したいと思いました。</p> <p>立命館大学政策科学部／板坂 青空</p>
実際に取材してわかること	地域それぞれの強み、魅力を直接感じる
<p>取材前までは、自治会活動がイメージできていませんでしたが、お話を伺うと、地域住民のことを1番に考え、悩みながらも本気で活動に取り組んでおられました。</p> <p>より良い地域を目指すために日々活動されている取組みを多くの方に知ってもらうことで、さらに良い地域活動につながると感じました。</p> <p>追手門学院大学地域創造学部／大西 輝宝</p>	<p>今回の取材を通じて、活動されている方に直接話を聞くことで、自治会の活動内容やそれぞれの地域の特徴について肌で感じることができ、とても良い機会となりました。</p> <p>地縁的なコミュニティがこれからどうなっていくかについても、考えるきっかけとなり、活動全体を通して、とても良い学びの機会となりました。</p> <p>追手門学院大学地域創造学部／大山 幹太</p>
地域の愛を発信	次に繋がるイバマチ編集会議
<p>今回、参加してみて茨木市の皆さんの地域に対する愛を感じました。地域のために、各地区の方々がこだわりを持って取り組まれていることを取材を通して知ることができました。</p> <p>それぞれの取組みの素晴らしさを共有できる貴重な機会に参加することができてよかったです。</p> <p>立命館大学政策科学部／小川 奈々</p>	<p>今回の活動を通して、地域の方がいかに愛情をもって取り組んでいるか身に染みて感じました。</p> <p>活動の中で、世代が異なる方々と意見交換をする機会があり、様々な視点にも触れることができ貴重な体験でした。今後も地域の方と一緒に取り組む活動があれば、参加してみたいと思いました。</p> <p>立命館大学産業社会学部／奥道 愛菜</p>
まちを観察しました	イバマチ編集会議を通して
<p>中津のまちを歩いたことをよく覚えています。地域の方や参加者の子ども達と会話する中で、まちでどう生きてどう楽しんでいるのかというのを感じ取ることができました。多世代が同じ場に集まり、様々な視座が共生する瞬間があったことで、自分のまちの捉え方も変わりました。</p> <p>立命館大学政策科学部／片桐 美海</p>	<p>今回初めて地域に行き取材をしました。初めはスムーズにやり取りができるか不安でしたが、たくさんお話ししてくださり、楽しかったです。</p> <p>今回の経験を通して、直接現地で話を聞くことで、私自身にとって勉強にもなり、正しい情報を伝えることができることを学びました。</p> <p>追手門学院大学地域創造学部／北村 帆花</p>
地域の人々とつながるプロジェクトの大切さ	地域愛を感じるまちづくり
<p>地域の方とつながるプロジェクトに初めて参加して、お会いした方全員が地域に「愛」を持ち、住民同士のつながりを大切にしていると感じました。一人ひとりが住むまちを大切に感じる事が、より良いまちへの変化につながると学びました。</p> <p>立命館大学政策科学部／小久保 萌衣</p>	<p>ワークショップの継続により次世代育成を行ったり、地域の特徴と地域コミュニティを尊重し、その上で対策を行うという活動をなさっていて、自分たちが住む地域への感謝と愛情を忘れず、地域の活性化を行っている姿勢に感動しました。</p> <p>立命館大学政策科学部／小谷 拓夢</p>

<p>取材を通して知った茨木市の目標</p> <p>イバマチ編集会議に参加し、実際に取材や事例集の作成に関わっていく中で各地域が何を大事にして活動を行っているか、何を目標にして活動を継続、または挑戦しているのかがわかりました。</p> <p>今回参加して、自分自身も知らなかった茨木の魅力について学習する貴重な経験ができました。</p> <p>追手門学院大学地域創造学部／中村 萌波</p>	<p>ウォークラリーについて</p> <p>私はウォークラリーの企画からそれを中心に参加しました。ウォークラリーでは、中津地区の方々と直に、細かく話し合い決めていくという大変貴重で勉強になる経験をさせていただきました。楽しかったです。至らない所も多く、迷惑をおかけしたとは思いますが、ありがとうございました。</p> <p>立命館大学経営学部／西山 佳志</p>
<p>イベントの企画から実行を通して感じたこと</p> <p>今回、中津ウォークラリーの企画から実行まで携わってきました。様々なイベントの実行にはボランティア活動などを通して関わることがありますが、企画段階から携わるのは今回が初めてでした。そのため、色んな方が関わっていることやイベントへの思いなどを理解し、感じる事ができたと思います。</p> <p>追手門学院大学地域創造学部／橋田 真南翔</p>	<p>地域活動の面白さと大切さ</p> <p>活動を通して、自治会がそれぞれの地域の特徴や課題に合った個性のある取組みをしていることを学びました。そして、私がこれまで生活して来られた背景には、こうした地域の取組みがあったことを実感しました。今回の活動で取材させていただいた方々のように、自分の暮らす地域をより良くするために考えて活動できる人になりたいです。</p> <p>立命館大学政策科学部／藤井 柊斗</p>
<p>今年度のイバマチ編集会議に参加して</p> <p>自治会の皆さんに取材をして貴重なお話をメモにとり、まとめて記事にするという経験は、私にとって非常に身になることでした。</p> <p>私たちが作った事例集により、茨木市の魅力を多くの人に知ってもらいたいです。</p> <p>追手門学院大学地域創造学部／藤本 瀬里奈</p>	<p>茨木市の関心が高まった</p> <p>取材を通して、地域に対する愛をとて強く感じました。これからも素敵な活動を続けてほしいと思っています。参加して、違った環境や価値観を持った人と交流し、新たな考えや活動を知ることができ、自身の成長にも繋がったと思います。</p> <p>立命館大学政策科学部／柘田 貴望</p>
<p>地域活動の魅力を実感！</p> <p>今回、初めて自治会や地域の方の生の声をお聞きしました。皆さんの地域への思いが、お話の中でひしひしと伝わってきました。私自身も、地域に関わっていきたくて思いました。ウォークラリーでも、たくさんの笑顔を見ることができ、地域活動の魅力を実感しました。こういった思いや活動を伝え、残していきたいと思いました。</p> <p>立命館大学政策科学部／宮本 沙綾</p>	<p>地域を支える人と想い</p> <p>取材を通し、自治会の皆さんによる地域のための活動と強い想いが、より良い茨木市を支えているのだと感じました。時代と人に寄り添った工夫を知ることができ、参加して良かったです。普段あまり地域の活動を気にしていませんでしたが、今後は茨木市だけでなく、自分の住む地域に対しても目を向けてみようと思います。</p> <p>立命館大学政策科学部／森 若菜</p>
<p>地域を知って、得た気付き</p> <p>参加してみて、茨木の大学に通いながらも知らなかった様々な課題に気づくことができました。取材の中で私たち大学生も地域自治に積極的に参加することの必要性を感じました。1年間を通して様々な経験をさせていただきました楽しかったです！</p> <p>立命館大学政策科学部／山本 萌美</p>	<p>縁の下で支える</p> <p>地域の課題についてあまり感じ取ることが無かったので、非常に新鮮でした。その中で、地域の為に活動する事の大切さや大変さを感じました。誰かの支えがあってできている事を理解し、改めて感謝しなければいけないと思いました。</p> <p>立命館大学政策科学部／渡邊 拓海</p>



地域課題の解決に向けた取り組み事例集

住みたい・住み続けたい まちづくり大百科

令和5年(2023年)3月

編集：茨木市 市民文化部 市民協働推進課

〒567-8505 茨木市駅前三丁目8番13号

TEL：072-622-8121(代表)

URL：<https://www.city.ibaraki.osaka.jp/>

次なる
茨木へ。



リサイクル適性 **B**

この印刷物は、板紙へ
リサイクルできます。